青森・十三湊遺跡

1 所在地　青森県北津軽郡市浦村大字十三

2 調査期間　第七六次調査　一九九七年（平9）八月～一二月

3 発掘機関　市浦村教育委員会

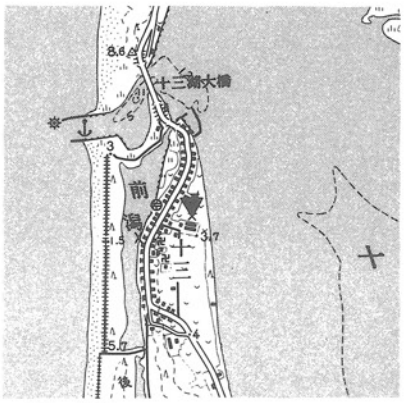
4 調査担当者　榊原滋高

5 遺跡の種類　港湾・集落跡

6 遺跡の年代　一三世紀～一五世紀中頃

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

十三湊遺跡は本州の最北端、青森県の日本海側に面した十三湖西側の半島状に伸びた砂丘一帯に位置する。遺跡の規模は南北約一・五km、東西が最大で五〇〇mを有する。十三湖周辺は、津軽平野を縦断して流れる一級河川・岩木川の河口に位置し、古くから岩木川流域を通じて結ばれた内陸部との交易流通の拠点であった。また、十三湊が繁栄を極めた中世には、在地の豪族、安藤氏が台頭し、日本国家の北の境界地として、また環日本海交易の中で蝦夷が島（北海道）との北方交易の拠点として、十三湊を支配した。



（小　泊）

一九九一年～九三年にかけて行なった国立歴史民俗博物館の調査によって、中世の十三湊を大規模な港湾都市遺跡として捉えるようになった。そこでは、明治期の地籍図や戦後撮影された航空写真の判読を通じて、領主・家臣屋敷、町屋、及び港湾部など、都市全体の復原案を提示できるに至っている。この復原案をもとに九四年から地元市浦村教育委員会が、九五年から青森県教育委員会が、それぞれ十三湊遺跡の学術調査を進めている。

本調査は推定された領主館の確認調査である。検出された中世遺構を見ると、屋敷割りの区画溝の中に、掘立柱建物・井戸・竪穴遺構・集石遺構・土坑（土壙墓の可能性のあるものも含む）などが見られる。特に注目される点は、二六基の井戸が検出されたことである。この場所が頻繁に居住空間として利用されていたことがわかる。そのうち、井戸SE〇二から今回報告する木簡が出土している。SE〇二からは、井戸枠内に廃棄された集石中から数十点ほどの京都系かわらけ（一五世紀中頃）が、さらに下層からは多量の白木の箸が出土していることから、北日本では非常に珍しく、京都のかわらけ文化を真似た宴会儀礼を行なっていたことが明らかとなった。木簡は、井戸枠の部材として利用された薄い縦板材に、文字が記されて

いたもので、木簡を二次的に井戸枠に転用したと考えられる。

8　木簡の釈文・内容

(1)　「之身□候　　(297)×(130)×4　061

事と申とて候（花押）

わずかに湾曲する薄い板材の内側に墨書がある。材の上半から中央にかけて墨書がある。材の上端と右側面は削られた痕跡を残すが、左側面と下端は破損している。断片なので文意は明確でないが、二行目の文末に花押と思しき墨痕があり、書状様の木簡かと考えられる。一行目の三文字目は「た」の可能性もあり、そうならば「□候」は「たり」となろう。

9　関係文献

青森県市浦村教育委員会『十三湊遺跡―第一八・七六次発掘調査概報　遺構・遺物図版編―』市浦村埋蔵文化財調査報告書第一〇集（二〇〇〇年）

（1～7・9　榊原滋高、8　綾村　宏（奈良国立文化財研究所））

木簡研究第一九号

巻頭言　町田　章

一九九六年出土の木簡

概要　平城宮跡　平城京跡　藤原宮跡　恭仁宮跡　長岡京跡　平安京跡　左京八条三坊十四町（八条院町）　末窯跡群　大坂城跡　広島藩大坂蔵屋敷跡　樟葉野田西遺跡　三条九ノ坪遺跡　大物遺跡　深田遺跡　安倉南遺跡　明石城跡坤櫓　明石城武家屋敷跡　袴狭遺跡　印場城跡　角江遺跡　御殿・二之宮遺跡　川合遺跡志保田地区　北条小町邸跡　伊興遺跡　丸の内三丁目遺跡　汐留遺跡　江戸城外堀跡牛込御門外橋詰　尾張藩上屋敷跡遺跡　青山学院構内遺跡　岡部条里遺跡　上山神社遺跡　湯ノ部遺跡　観音寺城下町遺跡　小谷城跡　高山城三之丸堀跡　松本城三の丸跡土居尻　松本城下町跡伊勢町　前橋城遺跡　大猿田遺跡　根岸遺跡　泉平舘跡　山王遺跡　舟場遺跡　無量光院跡　志羅山遺跡　後田遺跡　亀ケ崎城跡　宮ノ下遺跡　上高田遺跡　大楯遺跡　払田柵跡　長田南遺跡　金石本町遺跡　田尻遺跡　大坪遺跡　舞臺遺跡　馬寄遺跡　下町・坊城遺跡　新発田城跡　目久美遺跡　天神遺跡　三田谷Ⅰ遺跡　鴻の巣東遺跡　吉川元春館跡　長登銅山跡　飛田坂本遺跡　博多遺跡群　香椎B遺跡　鞠智城跡　前田遺跡　那覇港周辺遺跡群旧東村地区

一九七七年以前出土の木簡（一九）

美作国府跡　李　成市

韓国出土の木簡について　山里　純一

史料紹介　琉球の木簡二題

書評　山里純一著『沖縄の魔除けとまじない―フーフダ（符札）の研究―』　高島　英之

書評　東野治之著『長屋王家木簡の研究』　鶴見　泰寿

彙報

頒価　五五〇〇円　送料六〇〇円